

あかねは読書感想文が大嫌い^{だいきら}で、郷田先生^{こうだ}に出された感想文の課題に困っていた。あかねは教室で他の生徒が「ボツ」にして捨てた感想文を見つけ、内容を写して提出しようと考えたが、どの課題図書について書かれたものかわからない。そこで図書室で調べていたところ、司書（学校の図書館で本の管理や読書指導などを行う先生）の「しおり先生」に見つかり、不正をしようとしていることがばれてしまう。「しおり先生」は、どの課題図書を教える代わりに、自分のすすめる面白い本を読んでもくようにあかねに言った。

表紙やあらすじを見る限り、たぶん中学生の女の子の恋愛小説……、だと思う。よくわかんないけど、勝手にそうハンダンした。まあ、恋愛ものなら多少は興味ある。ネットテレビの恋愛リアリティーショー（台本のないリアルな恋愛を取り上げた番組）は毎回必ずチェックして
1
るくらい、あたしってそういうのに弱いんだ。

「ごめん観てなかった」

「お母さんとテレビ観てる」

「お笑い。森生える（笑える）わ」

なんか楽しそう。

そもそも、お母さんもテレビを観ないから、リビングに置いてあるあれって、ただのかい置物おきものだ。昔はそうじゃなかったのになと思った。お父さんがいた頃は、お母さんとお父さんに挟はさまれて、ソファに座っていた気がする。あれって、何年前のことだろう。

あのとくと一緒だった。三崎さん（あかねの同級生）のこと、みんなで一緒に喰う（ばかにして笑う）ときの気持ちに似ている。なにかが胸の奥（おく）でつかえていて、それを喉（のど）から吐（は）き出してしまいたいのに、どうしても出てきてくれない。そこになが詰（つま）まっているのかも、なんだかよくわからない。

— 3 —

玄関に鍵を差す音がした。
すぐに身体を起こす。

「ただいま」

お母さんの声が出た。

あたしは部屋を出て、玄関に顔を出した。

お母さんがヒールを脱いでいるところだった。

「おかえりなさい」久しぶりに出たあたしの声はちよつとかすれていた。「お風呂沸かしておいたよ」

「そう。夕食は食べたの」

「うん。ピザ残しておいたよ」

お母さんは疲れた眼をあたしにちらりと向けた。そのままリビングに向かう。なにか白い封筒のようなものを持っていた。それを破いて、中身を確かめている。あたしは廊下から、その様子を窺っていた。まだ、話しかけてはいけないうような気がした。代わりに、沈黙したままのテレビに眼を向ける。アイルーが観ているお笑い番組って、まだやってるんだろうか。お母さんは、そういうのって観るんだつくと、少しだけ考えた。それから、しおり先生が言っていた、なんていったつと、ジジットリック？（「叙述トリック」）スイリ小説を読むなら、お母さんも知っているんだろうか。息をいっぱいスい込むみたいに、胸の中が膨れあがっていく。

その代わりみたいに、お母さんが大きく息をもらした。

「あかね。こつち来なさい」

「なに」

お母さんの眼が、じろりとこちらを向いた。

どうしてだろう。胸が冷える。

「携帯の通信料、また高くなってるじゃない。どういうことなの。お母さん、言ったでしょう。変な動画ばかり観るんじゃないって」

お母さんが手にしていたのは、携帯電話の請求書だったらしい。

③ 風船が、しぼんでいくような感じがした。

「だって」

だって、仕方ないじゃん。

うち、誰もネットしないからワイファイないし。

スマホがないと、だって。

「口答えしないの！」

お母さんは唸った。

「いつもいつもくだらないことにお金ばかり使って、少しは勉強したらどうなの！」

あたしは、なにか言おうとした。

唇を開けて、でも、そこがとても震えて、だからなにも話せない。

喉につかえて、キカンを押上げようとして、なにかが溢れ出そうとするんだけど、その正体がなんなのかわからない。モヤモヤとした正体不明のガス。あたしの身体に、それが溜まっている。なにか言いたい。でもよくわからない。三崎さんのときと同じだ。考えると、頭がこんがらがって、爆発しそうになる。

「だって、あたし」

あたし、なにを言いたいの？唇を噛んで、それに耐えて、歯ぎしりしたときには、眼が熱くて燃えるみたいだった。頬をぞわぞわ這っていくものを感じながら、あたしは叫んでいた。

「おまえのせいじゃん！うるせえんだよクソババア！」

身を翻^{ひるがえ}して、自分の部屋に閉じこもる。

④ 怪獣^{かいじゅう}みたいにならずに不細工な声をあげながら、ベッドに飛び込んだ。

*

「それで土日は音信不通だったのか、つらみが深すぎる（とても）（つらい）」

月曜日の朝だった。

勝手に前の席に腰掛^{こしか}けてるアイルーが、納得^{なっとく}したように頷^{うなず}く。

あたしは鞆⁶のニモツを整理しながら、必要なものを机の中に押し込んでいたところだった。

お母さんに、スマホを没収^{ぼっしゅう}されたのだ。お母さんはいつものように土日も仕事に行っていて、仕事先にまであたしのスマホを持って行ってしまった。そこまでされると、もうどうしようもない。だから友達とは誰とも連絡^{れんらく}がとれなくて、退屈^{たいくつ}極まりない休日^{きゅうじつ}を過ごすはめになってしまった。ほんとうにつらみが深すぎた。

「ネットもできずに二日間もなにしてたの？ 原始人かよ」

「本、読んでた」

「課題本？」

「違うけど。他にやることもなかったから」

出かけようにもお小遣^{こづか}いはほとんど残ってなかったし、部屋にこもってしおり先生が貸してくれた本を読むくらいしか、時間を潰す方法がなかった。けれど、ほとんど読書なんてしないあたしにとっては、ほんとマジつらたにえんな（つらい）仕事だったと思う。何度も同じ文章を読み返してしまったり、いったん本を閉じると億劫^{おくせう}に感じて、なかなか読書をサイカイできなかつたり。それこそ、スマホがなくて退屈の極みじゃなければ、最後まで読めなかつたかもしれない。

そう、ちょっと信じられないかもしれないけど、本、最後まで読めたんだ。

「なんの本読んだの？ 面白いやつ？」

「うーんとね……」

どうやって言葉を返そうか、ちょっと考えたときだった。

教室の空気が変わった気がして、あたしは振り向^むいた。

教室に、三崎さんが入ってくるところだった。彼女は唇をきゅつと結んで、うつむきカゲン⁸で歩いていた。それを遠巻きに見たみんなが、くすくすと嗤^わい声をもらしている。近くにもれた小さな嗤い声に、あたしは眼を向けた。アイルーも嗤っていた。

しばらく、あたしはアイルーを見ていた。

「どうしたの？」

⑤ アイルーが、不思議そうに言う。

「えっと……」

また、モヤモヤした気持ちで胸がいっぱいになる。お母さんに怒^{おこ}られたときは、これがばんばんに膨れあがって爆発したんだと思った。すっぱくて、そわそわして、むかむかする感じがした。あたしはアイルーになにかを言いたかったけど、なんて言ったらわかりみがある（わかる）って返してくれるかわかんなくて、結局それを伝えることができなかった。

*

放課後、図書室へ行った。

しおり先生に、約束を守ってもらわなきゃいけない。図書室を覗^{のぞ}くと、受付でこの前のジミ⁹そうな子が本を読んでいるのを見た。この子には、あの硬^{かた}くて分厚い表紙をめくりあげることが苦痛じゃないんだろうか。不思議だった。それともスマホを買っ

てもらえない可哀な子なのかもしれない。そんなあたしだったら死んじゃう。

「あら、あかねちゃん」

本棚の向こうから、辞書みたいなのを何冊か抱えたしおり先生が顔を出した。重たそうだった。会うのは二度目なのに、もう名前を憶えられてしまったらしい。子どもっぽいし、どちゃくそ（とても）気安い先生だった。今日は眼鏡をしていない。

「先生、あれ、読んできたよ」

「すごい。早いじゃない。どうだった？」

「どうだったって言われても……。うーん、なんとなくエモい（気持ち（ゆさぶられる））感じはした」

先生は笑った。

それから、ちよつと運ぶの手伝ってくれる？　と言って、あたしに辞書みたいなのを押しつけてくる。図書委員でもなんでもないので、どうしてあたしがこんなことを手伝わないといけないのか、納得がいかない。先生は他にも似たような本を本棚から抜いて、それを抱えた。先生について行くと、運ぶ先はカウンターの奥にある司書室という場所だった。

司書室の中は畳敷きだった。畳なんておじいちゃんの家でしか見ない。学校の中にこんな場所があるなんて不思議な感じがした。先生に言われて、部屋の脇に持ってきた本を置いた。部屋の中には本が入っている段ボール箱がいくつか置いてあったけど、あとは綺麗に片付いている感じがした。真ん中にちやぶ台がある。

「靴脱いで、上がってね」

言われて、上履きを脱いだ。とりあえず畳に上がる。差し出された座布団にお尻を乗つけた。先生はちやぶ台の向こうに座って、お行儀良く正座をした。

どうしてこんなところに招かれたのか不思議に思っていると、先生はあたしの気持ちをみ抜いたみたいに、いたずらっぽく笑って言う。

「生徒の不正を手伝うんだから、^⑥ここで しないとね」

「じゃ、教えてくれるの？」

「その前に、あかねちゃんの感想を聞かせてほしいなあ」

「ええ？」　あたしはいやそうな顔をした。「どうして……」

「だって、感想を教えてくれないと、あかねちゃんが本当に本を読んできたのかどうか、わかんないでしょう？」

「あたし、うそついてないよ」

「他の子の読書感想文で課題をすませようとしてるの？」

そう言われると、ハンロンできない。

「でも、感想って言われても……。なに話したらいいの？」

「面白かった？」

「うーん、まあまあ。先生はすつごく面白いって言ってたけど、そうでもなかったよ」

「そっかそっか」先生は頷く。それから、無念そうな表情をした。「それは残念だなあ。そうかあ……」

その表情があまりにも気のドク¹¹そうに見えて、あたしはフォローする（補う）みたいに言う。

「まあ、そこまで悪くはなかったけど、思ってたのとちよつと違ったから、がっかりしたっていうか」

「どう違ったの？」

「女の子の恋愛ものかと思ってたけど、それは一個だけで、あとは違う話がいり入ったところとか」

「ああ、そうか。あれは短編集だからね。あかねちゃんは、恋愛ものが好きなんだ」

「まあね。男の子が主役の話とか、マジどうでもいいし、部活を頑張る話とかも、あたしべつに部活してないから、関係ないんだもん」

「そうかあ。そうだよなあ。でも、三つ目の恋のお話は、良かったでしょ？　甘酸っぱくて」

「甘酸っぱい、かなあ。うーん」あたしは首を傾げる。「まあ、ちよつとエモかったよね」

「エモいってどういう感じ？ 心が動いた？ 切ない感じ？」

「うーん、まあ、そうだよ。ちょっと悲しくて切ない系だった」

「自分もそういう恋を試してみたいって思っちゃう？」

「ちょっとは思うけどさ、でも、悲しくなるのはやだよ。あたしだったら耐えられないもん」

「そうかそうか。そうだよ。うん、わかる」

そんなふうに、先生は短編の一つ一つについて感想をいろいろと訊いてきた。ちょっと参っちゃったけど、あたしの感想にいちいちサンドウしてくれるのがなんだか面白かった。「そうだよ。え」って何度も頷いたり、「そうそう、先生もそう思った！」なんてちゃぶ台に身を乗り出してきたり、「あかねちゃんの言う通りだよ、あれはないよねえ！」なんて、お話の結末に文句をつけたりして、一緒になって笑った。

「じゃあじゃあ、最後の短編はどうだった？ あれがいちばん感動しなかった？」

「最後のは……」

あたしは口を開いて、それからじわじわ込み上げてくるものを感じて口を閉ざす。

確かに、感動的なお話だったのかもしれない、けど。

「ううん、あれはあんまり」

モヤモヤするものを感じて、ちゃぶ台に眼を落とす。

「ふうん？」

先生はちょっと不思議そうだった。

「それよりさ、正解を教えてよ。あの感想文、どの本のことだったの？」

「それはかわらないけれど」

先生は微笑んで、あたしを見た。

なんだかよくわからないけど、やさしい眼だと思った。

「でも、あかねちゃんにはもう、自分の読書感想文ができているじゃない」

「え？」

ちょっと意味がわからない。

「さっきみたいに、どこが面白かったとか、どこがつまらなかったとか。それで、自分が同じ立場だったらどう感じただろうって。それをそのまま書けば、それはもう立派な読書感想文だよ」

「えっと……」

先生の言っていることの意味を、考える。

「いや、え、感想文って、そんなんでいいの？」

「そうだよ。あかねちゃんが、恋愛小説を期待していたのに、一つの短編しか恋愛をテーマとしていなくて残念だった、っていう気持ちも、立派な感想なの。それは、あかねちゃんが抱いた、あかねちゃんだけの言葉だよ」

「いや、えっと……、でも、そうなのかもしれないけど、でも、面倒くさいよ、時間もないし、今から課題の本を読むなんてさ」「うん。読書って、感想文を書くために読むものじゃないものね。どんなことを書いたらいいだろうって考えながら読んだところで、どんな作品も退屈なものになっちゃう」

「でしょ！ ホンマツテントーってやつじゃん」

「でもねえ。実を言うと、あかねちゃんは、課題図書をもう読んでいるんだよ」

「え？」

この本だよ。

と、しおり先生は、どこからともなく、一冊の本を取り出して、ちゃぶ台に載せた。

それは間違いなく、ゴード（郷田先生）のプリントに載っていた一冊の本だ。

この前、図書室で読み比べたときに手にした小さい本の一つ。

いやいや、意味がわからない。

「あたし、これ読んでないよ？」

「あかねちゃんに貸したのは、ハードカバー（表紙がじょうぶな厚紙でできた本）の本だったでしょう。あの作品はね、文庫本になるときに、題名が変わっているの。有名なのは文庫本のほうで、郷田先生のリストに載っていたのも、文庫本のほう」

「えっと、どういうこと？」

「タンコウ本が文庫になるときにね、タイトルが変わることって、たまにあるんだ。中身はほとんど一緒だけれど、タイトルや装幀（本の表紙など）が変わるから、まるきり別の作品に見えちゃう。でも、お話はまったく一緒だから、あかねちゃんはどう課題図書を読み終えて、先生にたくさん感想を話しているってこと。あとは先生に話してくれたのを、箇条書きでいいから文章に起こすだけ」

ちよつと混乱した。

どういうこと？

⑦「もしかして、あたし、騙された？」

「ふふ」先生はいたずらっぽく笑う。「課題図書だっと思うと、どんな感想を書いたらいいかまえて読んじゃって、内容が頭に入ってこなくなるでしょう？ それより、すっごく面白い本だっつてオススメされて読んだほうが、なにも考えずにお話を楽しめるじゃない？」

ようやく理解が追いついて、あたしは半分だけ笑いそうになる。

「あの感想文がどの本のものであったのかも、教えてあげる。だから、自分の感想文を書いて提出するか、インチキをするか、それはあかねちゃん次第だよ。けれどね——」

先生は、何枚かの紙を取り出して、ちゃぶ台に置いた。

それは原稿用紙だった。

まっさらな原稿用紙だ。

「あかねちゃんは、読書感想文を書くことが、自分の世界とは無関係なことだっつて言っていたけれど、たぶん、そんなことはないんだよ。あかねちゃんもさ、自分の気持ちや感情に説明がつけられなくて、モヤモヤしちゃうときってない？」

先生は、まるであたしの心を覗いたみたいに、やさしく笑う。

「先生にもね、そういう経験がたくさんあった。自分の感じていることをうまく整理できなくて、自分自身のことかわからないときがあるの。だから、誰かに伝えて聞いてもらうこともできない。そういうときはね、自分の気持ちをノートに書くの」

「ノートに……？」

「そう。不思議なんだけれど、自分の気持ちを書き出そうとすると、自分の心を整理することができるのね。書いているうちに、自分が感じていたこととか、こんがらがっていた考えが綺麗にまとまっていく。読書感想文を書くことも同じなの。自分の気持ちを整えていくと、モヤモヤの正体が見えてくる。誰かに伝えることができるようになる。その練習になるの」

「でも……、あたし、語彙力とかないし、そんなの書けないよ」

「あかねちゃんの言葉でいいんだよ。あかねちゃんが感じた気持ちは、あかねちゃんだけのものなんだもの。それを自分の中だけにしまっておくなんて、とってももったいない。もしかしたらそこには、きれいな言葉やすてきな感情が眠っているかもしれない。それをかたちにすることで、自分に発見があったり、誰かに影響を与えることができるかもしれない。抱いた気持ちを、外に出さないでなかったことにしちゃうなんて、もったいないよ。この原稿用紙は、あかねちゃんの心をグゲン化してくれる、魔法のページなんだから」

あたしは、やさしい声でそう言うしおり先生の言葉を耳にしながら、彼女の指が撫でていく原稿用紙のヨハクを見つめていた。自分のこころをかたちにくれる原稿用紙。自分でもわからない気持ちを整理して書き出すための場所。本当に、そうなんだろうか。そんなの、意味があるんだろうか。わからないけど、モヤモヤしたものが、胸の中で膨らんでいる。

あたしが黙っちゃったせいだろうか、先生が言った。

「でも、そうかあ、あかねちゃん、最後の短編、だめだったかあ」

先生は、ちよつと不思議そうだった。

あたしは、唇を開いた。

開いた太腿の上で、拳を作つて、それをかたく握り締めながら。

「あのお話は……。だつて」

いらいらする。腹が立つ。

苦しさが溢れて、うめくみたいに言う。

語彙力、ないから、うまく言えないんだけど。

ぜんぜんきれいなじゃないんだけど。

「主人公の、女の子が、お母さんと仲良くて」

どうしてかな。震える指先のせいで、シャーペンの芯がボキリと折れてしまったみたいに、言葉が途切れてしまう。うまく言えない。わからない。整理できない。先生は静かに頷いた。カチカチとペンをノックして、あたしは言葉を押し出す。顔が熱かった。

「あたしとは、ぜんぜん違って、だから」

先生、わかる？

わかんないよね。

あたし、語彙力ないし、自分の気持ち、モヤモヤしてわかんないし、だから。

なんで、眼、熱いんだろう。

「そっか」

先生は頷く。

差し出された原稿用紙に、なにかが落ちて、染みを作った。

「ごめんね、つらかったね」

あたしは頷く。

それで、ああ、そうか、そうだったんだって思った。

「先生、あかねちゃんの感想文が読みたいな。あかねちゃんの気持ちを知りたい」

やさしい声音に、胸の奥がぎゅつとした。その感情の正体が、ようやくわかった。あたしは頬を這う熱を感じながら、唇を噛みしめた。掌に爪が食い込んで痛い。情けない顔を隠すように必死にうつむくと、みっともなくしゃっくりが出て、白紙のマスを一とつひとつ埋めるみたいに、透明なしるしを落としていく。

たぶん、きつとそう。

あたし、ずっとずっと、さびしかったんだ。

*

シャーペンの芯が切れた。

消しゴムを勢いよくかけたせいで、少しよれよれになってしまった原稿用紙の表面を、手で払う。消しゴムのかすを、ティッシュでくるんでくずかごに捨てた。それから、シャーペンの芯を補充する。

文章を書くのって、やっぱり面倒くさい。フリック入力（スマホなどで文字を入力する方法）の何十倍も時間がかかっている気がする。それでも、約束しちゃったんだから仕方ないって言い聞かせた。相変わらずの語彙力だし、若者言葉を使うなんてってゴータは怒るかもしれないけど、しおり先生には伝わるんじゃないかって、そう思う。あたしは、しおり先生に話した本の感想を、箇条書きみたいなへ

たくそな文章で記して、原稿用紙のマスを埋めていく。それから、最後の短編にふれて、お母さんのことを書いていた。仕事

忙しくて、いつも家にいなくて、最後にあたしと遊んでくれたのは何年前だろうってこととか、だからこの主人公のことが羨ましいってこととかを。

いつの間にかあたしは、お話とは関係のない気持ちを書き出してしまっていたけれど、でも、これは課題と関係がないからといって、くずかごに入れるわけにはいかない。

この気持ちを、なかったことにしたくはないと思ったんだ。

三枚目の最後の行までシャーペンを走らせたとき、玄関から音がした。

あたしは、のろのろと腰を上げて、部屋を出て行く。

帰ってきたお母さんが、ヒールを脱いでいた。

「おかえりなさい」

あたしはお母さんに声をかける。

お母さんは、なんだか疲れた眼をしていたけど、あたしの顔を見て、不思議そうに眉を寄せた。

「そんな顔して、どうしたの？」

伝えられるだろうか。

伝わるだろうか。

大丈夫、少しだけ、自分の気持ちのこと、整理できたような気がするから。

言いたいことがたくさんある。知ってほしいことがたくさん。たとえば、読んだばかりの小説の話とか、図書室にいる子どもっぽい先生のこととか、アイルーのこととか、教室で浮いちゃってる子が可哀想でどうしようって話とか、たまにはビザじゃないものを食べたいとか、それから、それから――。

⑩「あのね、お母さん、あたしね……」

(相沢沙呼『教室に並んだ背表紙』)

問1 線部1～15のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 線部A「億劫に感じて」(6ページ)・B「参っちゃった」(10ページ)・C「かまえて」(12ページ)とありますが、

この言葉の本文中の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A 「億劫に感じて」(6ページ)

ア すがすがしく感じて
イ おそろしく感じて
ウ 無意味に感じて
エ 情けなく感じて
オ 面倒くさく感じて

B 「参っちゃった」(10ページ)

ア あきれてしまった
イ 疲れてしまった
ウ 困ってしまった
エ しらけてしまった
オ 照れてしまった

C 「かまえて」(12ページ)

ア 準備して
イ 悩んで
ウ 集中して
エ 興奮して
オ 緊張して

問3 — 線部①「アイルーの返信はそっけないものだった」(2ページ)とありますが、あかねが「アイルーの返信」を「そっけない」と感じたのはなぜですか。六十字以内で答えなさい。

問4 — 線部②「リビングで観るには、あそこはなんだか、広すぎるような気がして」(3ページ)とありますが、あかねがこのように感じるのにはなぜだと考えられますか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
ア 家族そろってリビングで団らんしていたことを懐かしく思っているあかねは、リビングに一人でいると不安を感じ、体がすくんでしまうから。

イ アイルーの家と違って、自分の家のテレビは画面が小さいので、リビングの広さがテレビのサイズとつりあわず、リビングが広く思えるから。

ウ 画面の小さいスマホをベッドで観る習慣がついてしまったため、テレビもそれを置いたリビングも、どことなく大きなものに感じられるから。

エ いつも一人でテレビを観る自分には、リビングは最低限のスペースがあれば十分なので、大きなリビングなど必要ないと遠慮しているから。

オ かつては両親とテレビを観ることもあったが、いまはそんなこともなく一人で過ごすことが多いので、空間の広さが際立ってしまうから。

問5 — 線部③「風船が、しぼんでいくような感じがした」(5ページ)とありますが、これはあかねのどのような気持ちを表したのですか。七十字以内で答えなさい。

問6 — 線部④「怪獣^{かいじゅう}みたいに不細工な声をあげながら、ベッドに飛び込んだ」(6ページ)とありますが、あかねのこのときの気持ちはどのようなものだと考えられますか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。
ア こちらの苦しみも知らずに怒りをぶつけてくるお母さんに耐えられず、二度と口をきくまいと、腹を立てている。
イ 人の意見を聞くこともせず、自分の考えばかりを押しつけてくるお母さんの態度を、うっとうしく感じている。
ウ お母さんになにか伝えたいもののうまくいかず、きかない言葉を言うだけになってしまって、いらいらしている。
エ 突然お母さんに対して怒りが爆発してしまったので、感情をおさえられない自分のことを、不安に思っている。
オ 自分でもなんとなく感じていた問題点を、お母さんに鋭く指摘されてしまい、訳もなくむしゃくしゃしている。

問7 — 線部⑤「アイルーが、不思議そうに言う」(7ページ)とありますが、それはなぜだと考えられますか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア どんな本を読んだのかたずねていたのに、教室に三崎さんが入ってきたことに気を取られ、あかねは質問のことを忘れたようだったから。

イ 三崎さんが教室に入ってきたところをみんなで嗤^{わら}っていたのに、気がつくとかあかねは三崎さんではなく、自分のことを見つめていたから。

ウ さつきまで仲良く話をしていたのに、三崎さんのことをみんなで嗤^{わら}っているうちに、あかねがいつの間にか不機嫌^{ふきげん}のような態度を取っていたから。

エ いつもならみんなと一緒に三崎さんのことを嗤^{わら}うのに、今日のあかねは、みんなの態度を非難^{いしよ}するような眼^めで周りのことを見ていたから。

オ 三崎さんのことをみんなで嗤^{わら}って、あらためて本^{ほん}の話をしようと思ったのに、あかねが本^{ほん}について何を話^わすか思い詰^{おも}めている様子だったから。

問8 — 線部⑥「ここで しないとね」(8ページ)とありますが、 に当てはまる最も適切な言葉を、次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 相談 イ 懇談^{こんだん} ウ 対談 エ 密談 オ 雑談

問9 — 線部⑦「もしかして、あたし、騙^{だま}された?」『ふふふ』先生はいたずらっぽく笑う」(12ページ)とありますが、しおり先生はあかねを「騙^{だま}」して、どのようなことをさせたのですか。三十字から四十字で答えなさい。

問10 — 線部⑧「読書感想文」(13ページ)に取り組むことで、しおり先生はどういうことができるようになって考えていますか。その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 本の登場人物の気持ちを考えることで、他人の気持ちが正確に読み取れるようになり、相手を理解して親交を深められるようになる。

イ 自分の中にあるあいまいな気持ちを整理していくことで、自分の思いをうまく表現できるようになり、思い通りに相手を動かせるようになる。

ウ 自分の中に潜^{ひそ}んでいるすてきな言葉や感情に出会い、それを作品として公^{おおやけ}にすることで、他人に対して影響^{えいきやう}を与^{あた}えられるようになる。

エ うまく説明できない自分の気持ちを整理することで、自分のことがわかるようになり、その気持ちを他人に伝えられるようになる。

オ 本の登場人物に感情移入するなかで、他人の境遇^{きやうぐう}や考えがわかるようになり、人間的に成長して他人に認められるようになる。

問11 — 線部⑨「あかねちゃん、最後の短編、だめだったかあ」(14ページ)とありますが、あかねが「最後の短編」を気に入らなかったのはなぜですか。五十字以内で答えなさい。

問12 — 線部⑩「あのね、お母さん、あたしね……」(16ページ)とありますが、あかねがここでお母さんに話をしようと思ったのはなぜですか。本文全体をふまえて、百十字から百三十字で答えなさい。

問13 ……線部の表現について述べたものとして誤っているものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 「ジジットリック？」(4ページ)・「ホンマツテントー」(11ページ)のように、言葉をカタカナで表記することで、これらの言葉があかねにはあまりなじみのないものであり、聞きかじった言葉をあかねが使っている様子を表している。

イ 「まあ、ないなあ、って思っちゃうけれど」(2ページ)・「そう、ちょっと信じらんないかもしれないけど、本、最後まで読めたんだ」(7ページ)では、あかねが自分に言い聞かすように話が語られているが、これは自分で勝手に納得して物事を進めていく、あかねの性格を示すものである。

ウ 「シャーペンの芯がポキリと折れてしまったみたいにな、言葉が途切れてしまう」(14ページ)・「カチカチとペンをノックして、あたしは言葉を押し出す」(14ページ)では、言葉を記す道具であるシャーペンの芯と、自分の気持ちを言葉にしようとするあかねが、重なるように描かれている。

エ 「あたし、語彙力ないし、自分の気持ち、モヤモヤしてわかんないし、だから」(14ページ)・「なんで、眼、熱いんだろう」(14ページ)では、読点(、)を多用することで文が細かく区切られ、あかねの気持ちの高ぶりが表現されている。

オ 「差し出された原稿用紙に、なにかが落ちて、染みを作った」(15ページ)・「透明なしるしを落としていく」(15ページ)では、「涙」を落としたことがはっきりと表現されていないが、これは「涙」という言葉すら出てこない、あかねの語彙力のなさを伝えるものである。

カ 「若者言葉」(15ページ)とあるように、この物語には最近の若者が使う言葉がたくさん用いられ、今どきの女の子であるあかねの視点で話が語られている。

受	驗	番	号
国	語		

[illegible]